別記様式（第２条関係）

会　議　結　果　報　告　書

令和７年６月６日

会議の名称	第２回志木市総合振興計画審議会
開 催 日 時	令和７年５月２日（金）　１４時００分～１５時４０分
開 催 場 所	市役所３階　大会議室３-３
出席者職氏名	［委員］ 星野　敦子会長、大村　相基副会長、 吉澤　富美夫委員、岩澤　千惠子委員、関口　清久委員、 髙橋　大輝委員、中村　勝義委員、碇　俊美委員、 大貫　結子委員、小笠原　順子委員、木下　武三委員、 久保　大地委員、白川　美津江委員、那須　博志委員、 抜井　貴之委員、松澤　真衣委員、松波　雪枝委員 （計１７人）
欠席者職氏名	今村　弘志委員、田中　滿男委員、竹前　榮二委員、 岡田　明彦委員、正能　武委員、 （計　５人）
説明員職氏名	政策推進課　松田課長、柴谷主査、矢野主任 ランドブレイン株式会社　菅原、稲葉、三溝 （計　６人）
議　　題	１　開会 ２　諮問 ３　議題 (1) 第二次志木市将来ビジョン・将来構想（骨子）について (2) 志木市人口ビジョン（案）について ４　その他 ５　閉会

結　　果	議題（１）、（２）について、事務局より説明し、質疑応答を行った。 （傍聴者０人）
事務局職員氏名	松井市長公室長、松田政策推進課長、柴谷政策推進課主査、 矢野政策推進課主任

会議内容の記録（会議経過、結論等）

１　開会

２　諮問

３　議題

・報告事項の説明に入る前に、傍聴者の有無について確認を行った。
　→傍聴希望者なし。

・松田政策推進課長及び総合振興計画策定支援業務を委託しているランドブレイン株式会社菅原氏、稲葉氏、三溝氏から(1)～(2)について説明し、内容について質疑応答を行った。

(1) 第二次志木市将来ビジョン・将来構想（骨子）について

（委員）
　将来像について、市の特色でもある「市民力」の考え方にある「支え合い」の要素を入れた方がよい。
　また、資料１の「次期計画の取組の方向性」について、担当課へのヒアリングでは具体的施策の大幅な縮小や廃止等の意見は出にくいのではないか。
（事務局）
　８１ある具体的施策だが、細分化すると４００以上の事業からなり、毎年その一つひとつの事業について事務事業の見直しを行っている。具体的施策は生活困窮者への継続的な支援や様々な学習の機会の提供等、大枠の内容であり、あくまで方向性としての大きな変更はなかったということである。
（委員）
　地方創生のコンセプト【育む】について、出産後の子育てにも力を入れたいところであるため、「結婚、妊娠・出産」の後に「子育て」という言葉を入れてほしい。
（事務局）
　「結婚、妊娠・出産、子育て」と追記する。

（委員）

将来像の案１は、多くの市外の住民から「志木に住みたい」と選ばれるまちにしたいという思いを感じる。案２、案３はソフトで良い印象を受けた。

（委員）

将来像のキーワードとして「文化の継承」や「国際交流」等を入れてほしい。

また、共働きの家庭が多くなってきていることから、「共に育てる」や「共育て」という言葉や、子育てに限らず、大人になってからも互いに支え合うようなニュアンスを含めて「共に育て合う」というような表現を入れるのはどうか。

（委員）

将来像の案３「ちょっと良い、ちょうど良い暮らし」はとても良い表現。

これから少子化や高齢化が進む中、人とつながるような表現が入ると暖かい感じがする。支え合ってつながって、将来に結び付いていくような志木市だったら良いと思う。

（委員）

具体的な表現で「志木市は、こういうまちなんだ」ということをアピールするのが良い。「一人にさせない」「声をかけあう」「安心できる」という言葉が入ると良いと思う。

（委員）

生成 AI にアドバイスを求めたが、とても良い案が出てくる。先ほどの意見を汲んだ「手と手を取り合い笑顔あふれる幸せなまち志木」や、志木市が川のまちであることを汲んだ「水と緑が育む多様な文化が響き合うまち志木」等が出てきた。参考にしてはいかがか。

（委員）

第二次将来ビジョンで目指す１０年が長いのか短いのかよく分からないが、現状で感じる部分をそのまま表現するのが良いと思う。様々な意見があるが、最後に行き着くのは「住みやすいまち」だと思う。

（委員）

地方創生のコンセプトで「２０～４０歳代を中心とした転入の促進」、まちづくりのコンセプトで「子育て世代が住みたくなるまち」を挙げているが、近隣市町と比べて、あえて志木市を選択して住むという人がどれほどいるだろうか。案３の「ちょっと良い、ちょうど良い」のような表現がしっくりくる。

また、面積が狭いことを力にしようと思ったとき、「つながり」や「支え合い」等が魅力として打ち出せれば良いのかなと聞きながら漠然と考えていた。

（会長）

志木市で実際に過ごしている中で、志木市の魅力、その空気感をどのように伝

えられるかという視点が大事である。

（委員）

案２は、ＳＮＳの「いいね」等、今っぽくて良いと思った。「あなたに届け、『志木が好き』」は感想を言っているだけのような印象を受ける。「志木の夢」等の方が良いのではないか。

（委員）

「ちょっと良い、ちょうど良い暮らし」は、若い世代に響く。韻を踏んでいることも良い。コンセプトはあまり長くない方が良いので、「居心地の良い」という言葉等に変えても良いと思う。

また、地方創生のコンセプトでターゲットを２０～４０歳としているが、子育て世帯を増やすためには、学生のうちから志木に住んで、そのまま結婚して子育てしていくという流れも考えられるのではないか。

（事務局）

結婚、子育てをする世代として２０～４０歳代としているが、もっと若い世代も含む表現を検討する。

（委員）

先ほど面積の話があったが、こぢんまりとした市だからこそできることは何だろうかと、先ほどから考えていた。市民一人ひとりによって「ちょっと良い、ちょうど良い」というのが良い。「共に支え合う」の話題もあったが、本当に大事なことなので、この言葉が一緒に入ると良いと思う。

（会長）

「ちょっと良い、ちょうど良い」は一人ひとりにとってちょうど良いということであり、それは多様化、多様性の社会のキーワードである。

（委員）

志木市は狭いまちなので、「共に育てる」という考えはとても良い。地域で支え合うようなコンセプトも入れた方が良いと思った。

（委員）

「ちょうど良い」という言葉が良いと思う。欲張りかもしれないが、「ちょっと」より「いっぱい」が良いと思う。多様性の話で言えば、色々な人から見て「ちょうど良い」というのは非常に良い。例えば、「志木市で支え合う、ちょうど良い暮らし」等はどうか。長過ぎず端的にできると良い。

（委員）

将来像は他の自治体と同じようなものだと思われてはいけない。県外から見て志木市が具体的にどこの市か分かるようにという意味では、３案とも「志木」と入っているので良いと思う。案１は「続ける」が「選ばれる」と「成長する」の

後ろに付いている表現が気になる。案２は若い人が好きそうで良いと思う。「あなたに届け、『志木が好き』」は抽象的だが、将来像は抽象的で構わない。案３については、「ちょっと良い、ちょうど良い」は良いが、暮らしだけについてのことなのか、他にもあるのではないかと思う。

まちづくりのコンセプトについて、健康は全市民、市民力も全市民が対象だが、子育て世代のみ対象を絞っている。コンセプトの数に限りはあるが、高齢者や福祉に関する言葉が入るとより良くなると思う。また、コンセプトでは２０歳からとなっているが、１８、１９歳は対象に入らないのか。転入促進、結婚、妊娠・出産、子育てが入るのは結構だが、躍進する魅力的な地域づくりには人づくりが重要なポイントだと思う。

（委員）

子育ての部分について、学校のPTAが変わりつつある中、先生と子どもだけでなく親や地域も関わることがいろんな形の「教育」「育むこと」だと考える。10年後、子どもたちが志木に関わるので、「支え合う」という言葉に加え「関わり合える」等が要素として入ってくると良い。

（会長）

まだまだご意見があると思うが、議題１についてはここまでとする。

(2) 志木市人口ビジョン（案）について

（委員）

パターンⅡでは推計人口の調整を行っているが、最終的にどちらを推計人口として用いるのか。

（事務局）

パターンⅠは推計人口、パターンⅡは目標人口であり、どちらかを使うということではない。国立社会保障・人口問題研究所が公表している推計人口では、今後、本市においても人口が減少していくことを示しているため、子育て施策や定住施策を講じることで、目標人口を目指したいという考え方である。

（委員）

まちづくりコンセプト「子育て世代が住みたくなるまち」について、「住みたくなるまち」は市外の人からの視点である。アプローチの問題なので、どちらが先かということだが、まずは市内の「子育て世代が住みやすいまち」となり、それから市の魅力を様々な形で発信して「住みたくなる」になる。住みやすいから住みたくなる、という方が良いのではないか

（委員）

大いに賛成である。外向けに良くしていこうというよりも、今住んでいる人を

大切にする方が良い。コンセプトに「かなえる」とあったが、誰かがかなえてくれるのではなく、住んでいる私たち自身がかなえるものだと思った。発信力や、私たちが作り上げていくところにポイントを置けたら良いと考えている。

（委員）

志木らしさを打ち出すには子育て施策は本当に大事な施策だと思っている。子どもを中心に、こどもまんなか社会を作っていくような感じで、もっと子どもを打ち出しても良いのではないか。

（委員）

今いる人たちが住み続けたい、子育てしやすいまちだと思える取組が定住につながると思うので、そちらに力を入れた方が良いと思う。

（委員）

子育て世帯にまだ至らない人たちについても考える必要があると思う。上の世代だと結婚して家庭を持つということが当たり前だったが、今は未婚の方が男女ともに非常に多いようだ。ご自身の意志で選択しているのであれば良いと思うが、そうでない理由でお一人の方も多い。難しいがどう反映するかだと思う。

（委員）

まちづくりとは何かと考えたとき、人と人との出会いや人とのふれあいではないかと思う。両親が年を取ってきたので呼び寄せようとしたが、来てもらえない。長年培ったものがあって、ふるさとには自分をしっかりと知っている人がいるという理由である。これはまちづくりの根底にある大事なテーマであり、自分の居場所があるまちづくりを目指したい。

（会長）

資料の１９ページにある純移動率の仮定値で、男性の 60～69 歳がマイナスとなり、その後の年代ではプラスに戻っている。なぜ 60 代がマイナスになっているのかが疑問であったが、今の話を伺っていて、志木市と仕事だけでつながっていた人たちが、志木市をふるさとにできず、仕事という縁が切れたから離れてしまうのだと思った。

（事務局）

８ページにある平成２７年から令和２年までの５年間で、各年代がどのように転出しているかの資料でも、60～64 歳は転出と転入がほぼ同等、65～69 歳は転出が増えている状況であり、ご指摘の通り、定年がターニングポイントとなっていることが考えられる。

（委員）

パターンＩの人口推計を見ると志木市の未来は非常に明るい。この数字は平成２７年から令和２年の数値を使っているからなのか。

（事務局）

国立社会保障・人口問題研究所では令和２年国勢調査の統計結果を基に５年間の動向による仮定値を算出している。

（委員）

この時期は、駅前にマンションが連続して建っていた時期なので、高い数値となっているのではないか。

（事務局）

社人研の推計は過去の人口の動向を反映している。確かに例外的な事象も含まれているかも知れないが、その影響のみを除外して独自に推計人口を算出することは難しく、国立社会保障・人口問題研究所の推計を用いている。志木市の取組で転入者を増やして今の推計人口より増やしていくという意気込みを目標人口で示していきたい。

（会長）

議題２はここまでとする。

7　その他

8　閉会

備考　会議内容の記録には、発言者の立場を明記するとともに、発言の趣旨が容易に理解できるよう簡潔明瞭に記載すること。